

小学校

第1章 国語

1 小学校国語科の内容のまとめ

小学校国語科における内容のまとめは、以下のようになっている。

各学年とも、「2 内容」は、【知識及び技能】と【思考力、判断力、表現力等】の2つの内容のまとめで示されている。これらのまとめは、更に以下のように分けられている。

【知識及び技能】

- (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項
- (2) 情報の扱い方に関する事項
- (3) 我が国の言語文化に関する事項

【思考力、判断力、表現力等】

- A 話すこと・聞くこと
- B 書くこと
- C 読むこと

2 小学校国語科における「内容のまとまりごとの評価規準」作成の手順

ここでは、第1学年及び第2学年〔思考力、判断力、表現力等〕の「A 話すこと・聞くこと」を取り上げて、「内容のまとまりごとの評価規準」作成の手順を説明する。

まず、学習指導要領に示された教科及び学年の目標を踏まえて、「評価の観点及びその趣旨」が作成されていることを理解する。その上で、①及び②の手順を踏む。

＜例 第1学年及び第2学年〔思考力、判断力、表現力等〕の「A 話すこと・聞くこと」＞

【小学校学習指導要領 第2章 第1節 国語「第1 目標」】

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1)	(2)	(3)
日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。	言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(小学校学習指導要領 P. 28)

【改善等通知 別紙4 国語（1）評価の観点及びその趣旨 ＜小学校 国語＞】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使用している。	「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを広げたりしながら、言葉がもつよさを認識しようとしているとともに、言語感覚を養い、言葉をよりよく使おうとしている。

(改善等通知 別紙4 P. 1)

※ 〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において育成を目指す資質・能力を明確にするため、「思考・判断・表現」の趣旨の冒頭に、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域を明示している。

【小学校学習指導要領 第2章 第1節 国語「第2 各学年の目標及び内容」

【第1学年及び第2学年】 1 目標

(1)	(2)	(3)
日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。	順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

(小学校学習指導要領 P. 28)

【改善等通知 別紙4 国語(2) 学年別の評価の観点の趣旨

＜小学校 国語＞第1学年及び第2学年】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けているとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりしている。	「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもっている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えをもったりしながら、言葉がもつよさを感じようとしているとともに、楽しんで読書をし、言葉をよりよく使おうとしている。

(改善等通知 別紙4 P. 1)

※ 「思考力、判断力、表現力等」の各領域において育成を目指す資質・能力を明確にするため、「思考・判断・表現」の趣旨の冒頭に、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域を明示している。

① 各教科における「内容のまとまり」と「評価の観点」との関係を確認する。

「内容のまとまり」と「評価の観点」との対応は、以下のように整理する。

「内容のまとまり」

〔知識及び技能〕	〔思考力，判断力，表現力等〕
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	A 話すこと・聞くこと
(2) 情報の扱い方に関する事項	B 書くこと
(3) 我が国の言語文化に関する事項	C 読むこと



「評価の観点」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
-------	----------	---------------

つまり，〔知識及び技能〕は「知識・技能」，〔思考力，判断力，表現力等〕は「思考・判断・表現」と対応している。

② 【観点ごとのポイント】を踏まえ、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する。

（１）「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する際の【観点ごとのポイント】

一年間を通して、当該学年に示された指導事項を身に付けることができるよう指導することを基本とする。

○「知識・技能」のポイント

- ・基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔知識及び技能〕の指導事項について、その文末を「～している」として、「知識・技能」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。

○「思考・判断・表現」のポイント

- ・基本的に、当該単元（や題材）で育成を目指す資質・能力に該当する〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項について、その文末を「～している」として、「思考・判断・表現」の評価規準を作成する。なお、育成したい資質・能力に照らして、指導事項の一部を用いて評価規準を作成することもある。
- ・評価規準の冒頭には、当該単元（や題材）で指導する一領域を「（領域名を入れる）」において、と明記する。

○「主体的に学習に取り組む態度」のポイント

- ・第１編で説明されているように、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価できる評価規準を作成する。文末は「～しようとしている」とする。「学年別の評価の観点の趣旨」においては、主として、①に関しては「言葉を通じて積極的に人と関わったり」、②に関しては「学習の見通しをもって思いや考えをもったりしながら（学習の見通しをもって思いや考えをまとめたりしながら）、（学習の見通しをもって思いや考えを広げたりしながら）」が対応する。①、②を踏まえ、当該単元（や題材）で育成する資質・能力と言語活動に応じて文言を作成する。

（２）学習指導要領の「２ 内容」及び「内容のまとまりごとの評価規準（例）」

＜例 第１学年及び第２学年〔思考力、判断力、表現力等〕の「Ａ 話すこと・聞くこと」＞

ア 紹介や説明、報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて声に出して確かめたり感想を述べたりする活動を通した指導の評価規準の例

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
学習指導要領 ２ 内容	(1) オ 身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにすること。	イ 相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えること。 エ 話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。	国語科の内容には、「学びに向かう力、人間性等」に係る指導事項は示されていない。そのため、当該学年目標(3)を参考に作成する。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
内容のまとまりごとの評価規準 例	・身近なことを表す語句の量を増し、話の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにしている。（〔知識及び技能〕(1)オ） * 指導事項の一部を用いた場合の例。	・「話すこと・聞くこと」において、相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えている。（イ） ・「話すこと・聞くこと」において、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもっている。（エ）	・言葉を通じて積極的に人に関わったり、学習の見通しをもって思いや考えをもったりしながら、言葉をよりよく使おうとしている。

※１ 国語科においては、指導事項に示された資質・能力を確実に育成するため、基本的には「内容のまとまりごとの評価規準」が単元（や題材）の評価規準となる。

※２ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準については、上記の内容を踏まえた上で、当該単元（や題材）で育成する資質・能力と言語活動に応じて作成する。具体的には、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価するため、下記③、④に示したように、特に、粘り強さを発揮してほしい内容と、自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動を考えて授業を構想し、評価規準を設定することが大切であ

る。このことを踏まえれば、①から④の内容を全て含め、単元（や題材）の目標や学習内容等に応じて、その組合せを工夫することが考えられる。なお、〈 〉内の言葉は、当該内容の学習状況を例示したものであり、これ以外も想定される。

①粘り強さ〈積極的に、進んで、粘り強く等〉

②自らの学習の調整〈学習の見通しをもって、学習課題に沿って、今までの学習を生かして等〉

③他の2観点において重点とする内容（特に、粘り強さを発揮してほしい内容）

④当該単元（や題材）の具体的な言語活動（自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動）

※1, 2を踏まえた上で、児童の学習の状況を適切に評価するために、実際の学習活動を踏まえて「Bと判断する状況の例」、「Cの状況への手立ての例」を評価規準に沿って想定するようにする（第3編参照）。